

地域遺産のデジタル活用化の教育プログラムについて

—授業設計の効果検証と今後の展望—

長谷川 隼人

大正大学 教学マネジメント推進機構 学修支援センター 専任講師

(要旨) 静岡県下田市は、住民の提案で未来に残したい資産を「下田まち遺産」として認定する独自の制度を実施している。本プログラムでは、下田市と大学の連携によって、学生が「下田まち遺産」を題材にデジタル映像作品を制作することで、学生の実践的学びと地域資源の再発見を目的とした。住民との交流を通じた作品制作は、地域愛着の醸成と関係人口の増加に貢献できる一方で、短期間の実施や地域との関わりの深度に課題が残った。

キーワード: 下田まち遺産、地域活性化、関係人口、デジタル映像制作、産学連携

1. はじめに

静岡県下田市は、豊かな自然に恵まれており、多くの文化的・歴史的資産がある。下田市では、これらから未来に残したい遺産を住民から募る「下田まち遺産」という制度を景観行政に組み込み、今日までに154件を認定・登録している。これは全国的にもユニークな取り組みであるが、「下田まち遺産」を保全するだけでなく、もっと住民の自発的なアイデアによって活用する余地も残されている¹。

下田市は、多くの地方自治体と同様に少子高齢化に直面するなかで、観光を基幹産業として交流人口の増大に力を入れてきた。近年では、コロナ禍を契機として、首都圏に近いワーケーションのスポットとして、関係人口の創出にも目を向けた施策を打ち出している。他方、下田市は、本学の地域構想研究所と連携協定を結んでいる。このように、下田と本学の間には、双方の先人が関係づくりを模索した経緯があった。そして、下田市出身の筆者は、下田に地縁、血縁がある。

そこで、筆者は、下田でまちの景観保全に関わってきた方へのヒアリングを契機として、2024年

3月と8月に下田市市役所を訪問して、どのようなかたちで新たな協働ができるのか話し合い、教育プログラムの考案と実践の準備を進めた。

このプログラムは、2024年3QTの表現学部表現文化学科2年生を対象とするプロジェクト型学習(担当:田島悠史准教授)の一環として実践した。それは、「下田まち遺産」をコンテンツとするデジタル映像作品を学生たちがグループで制作するものである。実際、下田での実習は、2024年10月2日から4日にかけておこなった。

下田での実習の間、地域の魅力を発信している方々と学生の交流会、学生たちが撮影した素材を編集した映像作品の試作にフィードバックを得るために、市と共催し下田市役所の課長級職員や地域のキーパーソンを招いた中間発表会を実施した。学生たちは、実習以後に発表会で得たアドバイスなどを踏まえて、2024年度の3QTの学修成果として、4チーム(学生16名)が作品を完成させた。

そこで、本稿では、この教育プログラムの狙い、期待される効果、実践のプロセスと効果の検証、課題と今後の展望について紹介する。

¹ 長谷川、田島(2024)

2. 教育プログラムの設計

(1) 狙いと効果

自治体や大学が双方の限られた人的、物的資源を活用して連携、協働するうえでは、教育プログラムがそれぞれにどのようなメリットがあるのか明確にしておく必要がある。

大学にとって、学生が実社会における実践的な学びを得られることは学生一人ひとりの学びを広げ、深化できる、という点で大きな意義がある。一方、自治体としては、一般的には大学の専門家による知見、大学生の人的資源などを政策立案や遂行に活かせる可能性をあげることができる。たとえば、観光が基幹産業である下田市にとってみれば、学生たちの取り組みを観光政策に活かし、それが交流人口の増加に寄与するということがメリットの一つとしてあげられる。

だが、今回の教育プログラムは、自治体のまちづくりに直接的に寄与できることを目指しているわけではない。今回のプログラムは、下田市が力を入れようとしている関係人口づくりに主眼を置いている。

関係人口とは、継続的に地域に関わる「よそ者」として定義される。この定義からもわかるように、これまでも存在してきた事象に注目し、概念化したものといえる。近年、注目を集めてきた背景には、自治体内部で地域活性化の人材をいかに生み出し育てるか、という課題感がある。こうした中、継続的に地域に関わる「よそ者」の存在が地域内の住民に与えるポジティブな影響が地域づくりのグッド・プラクティスの分析のなかで明らかにされてきた²。

筆者が属する大正大学の地域構想研究所は、下田市と連携協定によって関係を保つ、潜在的な関係人口である。今回のプログラムは、「よそ者」による「下田まち遺産」をコンテンツとする作品づくりが、下田の人々に対して刺激を与えることを期待している。つまり、学生たちの活動や作品を通して、地域資源の隠れた魅力を再認識し「下田まち遺産」を利活用するための住民のアイデアづ

くりが促進されることを狙っているのである。

また、学生たちにとってプロジェクト型の学習は、実践を通して知識・技能の獲得のみならず、協働する力の涵養を期待できる。今回の教育プログラムの対象となる学生は、放送・映像コースに属し、将来的にメディア業界への就職を検討しているものが多い。本学の2年次は、1年次の初年次教育を経て、3年次以降の専門演習（ゼミ）の専攻に向けて、本格的な専門教育へと移行する時期に位置する。このような時期に、自ら企画をたて、撮影、編集の実践経験を得られることは、自身の課題を見だし、今後の学びの目標を設定する機会となる。また、仲間とともに限られた時間と資材のなかで作品づくりをプランし、マネジメントすることは、社会人として求められる協働する力の涵養にもつながる。

さらに、今回の教育プログラムには、これからの下田の関係人口を増やしていく狙いもある。プレ社会人としてキャリア形成の準備期に位置する大学生にとって、大学時代の印象的な経験は、将来的に下田に関わる可能性を開く。

たとえば、本プログラムの担当教員である田島は、学生時代に下田でアート作品の展示をおこなっていた。田島は、その後アートマネジメントの専門家としてのキャリア形成を進め、再び下田にて表現学部プロジェクト型学習の実現に協力することになった。

このように、今回の教育プログラムは、学生の実践的な学びに加え、キャリア形成に影響を与え、卒業後も地域と関わるきっかけとなる。将来的な関係人口の増加にも貢献する効果が期待できる、といえよう。

(2) 仕掛けと工夫

このプログラムでは、学生による「下田まち遺産」をコンテンツとする作品づくりが、結果として下田に暮らす人々に対して刺激を与えることを期待している。そこで、あらかじめ下田の課題解決を学修の目的とせず、フィールドワークを通して自らが感じたものを重要視して作品制作をおこ

² 田中(2021)

なうことをゴールとした。したがって、学生たちに1つ以上のまち遺産をコンテンツとして活用すること以外の条件は課さないようにした。

以上のゴール設定のもと、プロジェクトは、4つのフェーズから構成した。まず、フェーズⅠ（9月後半）は、事前準備として学生たちが作品構想を話し合い、撮影スポットの候補の選定をおこなう期間である。次に、フェーズⅡ（10月2日から4日）は、下田における実習を設定し、短期間に集中して撮影および仮編集とふり返しをおこなう期間である。そして、フェーズⅢ（10月中旬から後半）は、事後授業として、仮編集をした作品に対するフィードバックと完成に向けた作品構想の軌道修正やブラッシュアップをする期間である。そして、フェーズⅣ（11月初旬）は、完成した作品へのフィードバックや学生個人のふり返しを実施する期間である。

このように、プログラム全体を通して、フィードバックとふり返りのサイクルを繰り返すことによって、経験からの気づきや教訓の言語化を促し、一人ひとりの学生が自律的な学習サイクルを回せるように設計をした。

今回の教育プログラムの狙いを実現するために、各フェーズで様々な仕掛けと工夫を試行した。たとえば、自律的な学修サイクルを回すことができるように、フェーズⅠにおいて学生たちの作品制作に関する構想、すなわち学修目標を設定してもらい、フェーズⅡの実習直後とフェーズⅢの作品完成直後に、自身の作品に対する満足度と課題について言語化をしてもらった。

また、学生たちに下田を知ってもらうために、フェーズⅠでは、まち遺産を所管する下田市役所



図-1 下田市役所職員による事前授業の風景

建設課都市住宅係と連携して、下田市の情報、まち遺産制度の説明を実施した（図-1）。

フェーズⅡでは、学生たちの作品づくりを媒介に学生たちと下田で暮らす人々が相互に刺激し合うことを期待して、交流や仮編集作品に対する講評会の機会を設けた。

そして、フェーズⅡからフェーズⅣにかけては、下田有線テレビ放送（以下、SHKと略記）より学生たちの作品づくりに対するテクニカルなアドバイスの協力をいただいた。専門職の方から助言やフィードバックをもらえる経験によって、放送映像業界に関心を持つ学生たちのモチベーションを高めることを期待したためである。

今回、SHKは、学生たちのPBLを番組化するために、学生たちの下田における実習を密着取材するとともに、学生たちにインタビューをおこない、「下田まち遺産の使い方 ～大正大学表現学部下田プロジェクト～」(49分)を制作した。番組は、2025年1月11日に下田市民に向けて放映された。その際、番組内にこちらで用意した評価用のQRコードを埋め込んだ。このようにして、より多くの下田市民が放送を通して、学生たちの作品に意見を伝えられるように工夫した（図-2）。



図-2 SHK制作番組に埋め込んだQRコード

なお、学生たちの取り組みを下田の人々にオンラインタイムで広報するために、SHKのニュース報道に加えて、下田市役所に協力してもらい伊豆地域を発行対象とする『伊豆新聞』に実習中に取材してもらった（図-3）。



図-3 2024年10月4日付『伊豆新聞』朝刊6面

(3) 狙いや効果の検証方法

このような工夫を通して、今回の教育プログラムが学生のみならず下田で暮らす人々への刺激や影響を与えることを意図して、相互に変化・成長する機会の創出を狙った。

教育効果の検証は、各フェーズにおいて筆者が作成をした設問への回答およびリフレクションのテキストを分析することで進めた。

まず、フェーズⅠの初回授業終了後、学生たちの下田のまちへのイメージを確認した。次にフェーズⅡの下田実習終了直後に、「下田にどのくらいの愛着が湧いたのか」理由を含めて確認した。これら設問を通して、将来的に下田に対する関係人口を増やしていく狙いに照らして、今回のPBLが学生たちにどのような受け止め方をされたのか確認することを目指した。

次に、フェーズⅢの作品完成直後に、自身の作品に対する短い紹介文と見どころを書いてもらうことで学修成果物の総括を促すとともに、今回の教育プログラムを通して身についたと思われる「力」とその理由について言語化してもらった。このように、学修成果物（作品）に対する総括的な自己評価のみならず、プロジェクトの開始から終了時点までの自身の変化にも目を向けることで成長実感の可視化を図った。

3. プロセスと効果の検証

(1) 学生たちのまちへの愛着の創出

先述したように、フェーズⅠからフェーズⅡにかけて、学生たちの作品づくりを媒介に学生たちと下田で暮らす人々が相互に刺激し合う仕掛けをおこなった。これは、学生たちのまちへの愛着を高める、という点において効果的であったと考える。

下田実習初日の夕方には、いわゆるワールド・カフェ方式でおよそ90分間の交流会を実施した。まず、交流場所として、元金融機関の建物を関係人口の交流拠点としてリノベーションした複合コミュニティセンターを利用した。この施設には、コワーキングスペース、ゲストハウス、シェアオフィスなどがある。また、下田市役所建設課職員：2名、SHKのレポーター兼編集者、カメラマン：2名、民宿経営者兼デザイナー（Uターン）：1名、フリーランスの翻訳家（Iターン）：1名、複合コミュニティセンターマネージャー（地域おこし協力隊）：1名の計7名に出席をしてもらった。地域活性化のキーパーソンとして活躍している人々の交流が双方にとって刺激となることを期待した（図-4）。



図-4 コミュニティセンターでの交流の様子

また、実習最終日には、下田市の協力を得て下田市文化会館において、仮編集作品（主としてコンセプト部分）に対する講評会の機会を設けた（2時間）。そこには、初日の交流会に参加した人たちに加えて、下田市の観光交流課、産業振興課などの課長、下田市観光協会事務局長にも出席をもらい、その場で学生たちへのフィードバックや

意見交換をおこなった。

そのうえで、下田実習の終了直後に、「下田にどのくらいの愛着が湧いたのか」(5件法)とその理由を含めて確認した。その結果は、図-5で示すように約8割の学生が「よく湧いた」以上の実感を抱いたことがわかった。このように、学生たちの多数が実習経験を通して、下田のまちと自身をポジティブな関係に位置づけることができたといえる。

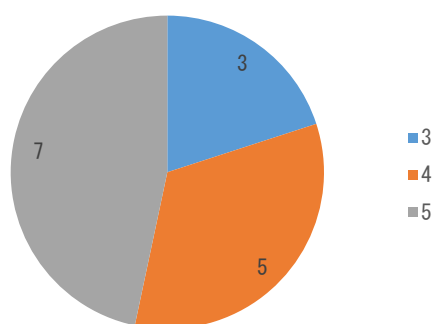


図-5 実習によって下田にどのくらいの愛着が湧いたか (N=16、n=15)

「とてもよく湧いた」を選択した回答の理由としては、次の記述が心理的な距離感の変化を端的に示している。

「はじめは旅行じゃん！と思っていたのですが、お店の方に下田の魅力をインタビューをしたりと取り組んでいるうちに旅行とは全く違うなと思うことが多く、下田をただただ楽しむというより、楽しみつつ地域の方々と協力して映像制作に取り組んでいるような気持ちになったので、下田という地域にも下田の方々にもとても愛着がわいた3日間となりました」

他にも「とてもよく湧いた」理由として、以下のような記述がみられた。

「実際に足を運んでみて、魅力というものはそれだけではないと気づきました。映像には残せない魅力です。それは下田の方々の『下田への思い』でした。『下田の魅力について教えてください』と質問を問いかけた際に、どの方も満面の笑みで、

魅力を教えてくださいました(中略)また下田の方々は快く案内してくれたり、撮影のアドバイスを教えて頂いたり、温かく私たちを迎えてくれました。特に印象に残ったのは飲食店〇〇のおばあさんが、下田の昔話を聞かせてくれたことです。おばあさんの温かい笑顔と下田への深い愛情を感じ、私も下田の一員になったような気がしました」(〇〇は個人名ゆえに伏せ字とした)

「今回、初めて下田に訪れました。私が感じた下田の魅力は人の温かさです。グルメを素材にするにあたり、お店の撮影許可を撮ったのですが、当日に撮影許可をお願いしたのにも関わらず、快く受け入れてくださいました。加えて、おすすめの場所や撮影方法の案などアドバイスくださった店主さんもいて、初めましての学生にそこまで深く関わってくれるのかと感動しました。3日中、1.5日は雨でしたが、晴れていると本当に景色が綺麗で、自転車で訪れたベイサイドプロムナードと犬走島での撮影がとても楽しかったのが印象的です。山も海も近くにあり自然をたくさん感じる事ができました。お店の店員さんが、『また来てください』というお言葉をくださったり、今度はプライベートで週末旅行に来てみたいなと感じました」

「旅行に行ったりしても今回ほど街を散策する時にいい場所を見つけながら歩くことはなかったため、街のことをよく知ることができた。それに取材をさせていただいたお店の全ての方々が、自分達に温かく接してくれた。取材の関係で喫茶店に行っても人数分ではなく1人分しか料理を頼んでいなくても、デザートのお橙を4人分くれたり。サンドイッチで使ったパンの耳を食べていいよと出してもらい、ジャムまで出していただいた。最後に写真をお願いした時も快く引き受けていただいた。このような経験から下田のことが好きになった」

これら多くの学生が選択したスコア5の理由には、作品づくりを通して、まちのことを自分事化ができている様子が見られるだけでなく、まちの